2016.4.2 GEWANDHAUS 龍ヶ崎ゲヴァントハウス【オリジナルCDコンサート】

没後120年 第1回 “ブルックナーの世界”／春の歌を聴く

プログラム

今年は、音楽史上最も重要な交響曲作曲家のひとり、ブルックナーの没後120年に当たります。そこで数回に分けてブルックナーの世界へご案内します。今日はその第1回目ですが、合間には春を扱った小品を集めました。合わせてお楽しみください。

ブルックナーは1824年オーストリアのアンスフェルデン生まれました。楽才のあった父から教育を受け、いとこのヴァイスというオルガン奏者でもあった教師のもとでオルガン奏法を学び、10歳の頃には礼拝でオルガンを弾いていたという才能の持ち主でした。1848年に聖フローリアン修道院のオルガン奏者、1856年にはリンツ大聖堂のオルガニストに任命され、音楽家への道を本格化させていきます。1868年、ウィーン国立音楽院の教授に就任した頃から交響曲を書く事に没頭して行き、生涯、習作交響曲、第0番を含め、11曲の交響曲を中心にミサ曲、テ・デウム等の宗教音楽、オルガン曲などを残しました。ブルックナーの交響曲の作風はどの作品も規模が大きく、オルガン的な響き、開始を弦楽器のトレモロで始める手法、オーケストラを突然休止(ゲネラル・パウゼ)させたあと再び演奏させる手法、同じモチーフを何度も反復させる手法など、特徴的で個性が強く独自の地位を占めています。また、度々改訂が行われたため、1曲について複数の稿や版が存在するという珍しい作曲家でもあります。交響曲第2番は全休止が多いことから「パウゼ交響曲」と呼ばれることもありますが、既にブルックナーの魅力的な作風が随所にみられる佳曲です。交響曲第3番は1873年に第1稿が完成、ワーグナーに献呈されました。初期の交響曲で最も知られた名曲。第3楽章と第4楽章の最後の部分を3種の稿で聴きくらべてみます。その違いを体験してください。ごゆっくりお楽しみください。　(中川)

＊＊＊＊＊＊＊

グスタフ・マーラー（1860～1911）
春の朝（「若き日の歌」より第1曲）
クリスタ・ルートヴィヒ（メゾ・ソプラノ）／ジェラルド・ムーア（ピアノ）（1959年EMI盤）

フランツ・シューベルト（1797～1828）
歌曲「春に」D882
ハンス・ホッター（バリトン）／ジェラルド・ムーア（ピアノ）（1959年EMI盤）
歌曲「春の信仰」D686
ワウトラウト・マイアー（メゾ・ソプラノ）／ヨーゼフ・ブラインル(ピアノ)（2005.9.12サントリーホールでのLive）

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）：
歌曲「すみれ」K.456
エディット・マティス（ソプラノ）／カール・エンゲル(ピアノ)（1975.9.2　ルツェルン音楽祭でのLive）

アントン・ブルックナー（1824.9.4～1896.10.11）：
交響曲第２番ハ短調（第2稿）～抜粋
小澤征爾指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
（1985.11.12　ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive）

＊＊＊ 休 憩 ＊＊＊

フェリックス・メンデルスゾーン（1809～1847）
無言歌集～“五月のそよ風”op.62-1／“春の歌”op.62-6
田部京子（ピアノ）（1993年録音 DENON盤）

エドゥアルド・グリーグ（1843～1907）
叙情小曲集～“春に寄せて”
アンドレイ・ガヴリーロフ(ピアノ)（1995.11.6　紀尾井ホールでのLive）

アントン・ブルックナー（1824.9.4～1896.10.11）：
交響曲第３番ニ短調（第3稿 1889年ノヴァーク版）～第1楽章から、第2楽章から、第4楽章
ロリン・マゼール指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
（1996.5.18　ウィーン・ムジークフェラインザールでのLive）

【稿・版による第3楽章・第4楽章最後部分の聴きくらべ】
第1稿　ヘルベルト・ブロムシュテット指揮ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団(1998.9.13Live)
第2稿　ラファエル・クーベリック指揮バイエルン放送交響楽団(1980.10.9Live)（**第2稿** 1878年エーザー版）
第3稿　ロリン・マゼール指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

★ホームページアドレス　http://www.bekkoame.ne.jp/~hippo/gewandhaus/